
紫の縁

小羽 朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫の縁

【ZPDF】

Z9882D

【作者名】

小羽 朔夜

【あらすじ】

次深様企画、『羽篠紫』^{うしのゆかり}に参加させて頂きました。白く淡く儂い花。別れを象徴するかのような花が私は好きでなかった…

ほんのりと朱く色付いた薔。まるで今にも透き通つて消えてしまいそうな白く淡い花弁が少しずつ顔を出そうとしている。少しづつ、春を告げようとしている。また、この花の咲く季節となつてしまつたのですね。

人の心ものだけからまし、と詠つたのは彼だけれども全くその通りであると思う。私の場合、理由は少し違つてているのだけれど。あの花を愛する心が分からない。

あの花を称える気持ちがしれない。世の中にあれほど罪深き花はないといつうのに。ずっと渴望し続け、やつと咲き揃つたと思えば呆気なく、いとも簡単に散りさつてしまつ。まるで、この世の幸せを顯しているかのように。あの花が散りゆくとき、いつも哀しい想いに囚われる。それなら、最初から夢など見せてくれなければ良い。母が亡くなつたとき。仲の良かつた友人が婚姻を理由に学校を辞めたとき。可愛がっていたシロと別れなければいけなくなつたとき。それらはいつもこの花が散るのと時期を同じくする。もう、何も失いたくはないといつうのに。

そう考え事をしながらも手は止まらず、形式通りに淀みなく進められていく。ほうと息を着くと田の前には大小様々な色彩がちりばめられた花籠が出来上がつていた。

「流石は紫さん。冬を乗り越えた強さの中に春の息吹を感じさせれる作品、ですね。

吉野様もさぞお喜びになることでしょう。貴方の作品にあんなにお金をお出しになるという時には驚いたけれど、その甲斐はあつたよ

うね。」

「…ありがとうございます。」

「そんな、謙遜しなくて良いのよ。貴方の作品は本当に素晴らしいから。もっと誇りてちょうどいい。」

さて、今日は紫さんもお疲れでしょうし、ここまでこじましようか。
また、いつでもいらしてね。」

「ありがとうございます。では失礼します。」

「どうにも、ここは何度足を向けても慣れることが出来ない。華やかに咲き乱れる花花。私に目を止めると一斉に頭を下げる使用人達。それは私が主の客であるからだ。どんなに主が気に入っていても、いくら娘のように接していようとも、私自身はあくまで落ちぶれた華族の末でしかない。お情けで通わせて頂いている女学校もあと1年で卒業となる。女が学なんてといわれる時代、これは稀有なのかもしれない。しかし、卒業したその時、私はどうすれば良いのだろう。自らのことでありながら見透すことの出来ない先に感じるのは不安だけだった。

「おかえりなさいませ、お嬢様。今日は先生のところでしたね。夕餉はお済みですか。」

「…」はじめんなさい。今日は食べたくないの。」

「そんなことを仰らずに。お身体に悪うござりますよ。」

「少々気分が優れなくて。申し訳ないけれど、早めに休ませて下さい。夕餉ならあちらで軽く頂きましたから。」

「そうですか。それなら良いのですが。」

しかし、お嬢様。本日は田那様からお話があるとか。先程から奥でお待ちになつておられますよ。出来ればお顔をお出しして下さいな。お湯と布団はこちらで用意致しますから。」

「お父様が?分かりました、ありがとうございます。」

「只今帰りました。」

座敷に入ると、いつもと違う芳しい薫りが鼻をついた。余程「機嫌なことがあつたらしい。お医者様に注意されているのだから、あまり深酒しないと良いのだけれど。

時既に遅く、田の前には飲み干されて転がつた熱燗数本とすっかり出来上がつた父。「これは後でお母さんを呼ばなければいけないだろ?」

「ああ紫、帰つたか。早速だが話とはな、お前に良い話が来てるのだよ。」

相手は祖父の代で成り上がつたらしいが将来性がある、人柄の良い青年でな。歳はお前より二つ上だつたかな。

どうやら何処かでお前のことを見始めたといふんだよ。どうだらう、悪い話じやない筈だ。お前ももう家庭に入つて良い歳だ、区切れも良いし、ここいらで学校を辞めて嫁いだりどうだ。」

ああ、やはり。いつかは来るであろう話であることは分かつていた。家のことを考へても父がこれを良い話だといつのは分かる。私にとつても、政略結婚などではなく望まれての結婚ならば悪い話ではない。たとえそれが華族であるという銘が欲しいだけだとしても。けれど…私は。

そつと目を閉じると瞼の裏にあの花が溢れて。散つてゆく。際限もなく、まるで私の希望に駄目押しをするかのように。「ああ、諦めるしか、ないのでしょうね。

「分かりました、そのお話を受け致します。」

「おお、受けてくれるか。またとない良い話だしな。」

支度については「口に聞きなさい。あの娘ならきっとよくやつてくれ

れるだらう。母親替わりは一宮先生に頼んでみよう。せつと先生も喜んで引き受け下さるだらう。

「はい…

では、おやすみなさいませ。お父様。

「ああ。顔色が優れないな。しつかり休みなさい。」

「はい、ありがとうございます。それでは、失礼致します。」

お父様をおみやげさんにまかせて部屋に戻ったところでやつと一息をついた。

また、私は自分に、お父様やおみやげさん、他の使用人の方々に対しても嘘を重ねてしまつていて。けれども、この気持ちだけは、あの方のことだけはけして悟られてはならない。あの方に迷惑がかかつてしまふ、私がお慕い申し上げる方に。

“ 拝啓 若紫の君

寒い日が続きますね、最近お会い致しませんが如何お過ごしでしょうか。トランプでお友達と遊んだという話、拝見しました。大人しい貴女らしくもなく遊戯に

一喜一憂する姿が目に浮かび、思わず微笑んでしまいました。たゞ、楽しかったことでした。たゞ、樂しかったことでした。ようね。

私の方は相変わらずです。前にもお話したかと思いますが、同級に、政府のあり方を正そ

うと躍起になつている男がいます。先日は、その集会に危うく連れて行かれそうになり、

すんでのところで逃げ延びる」とが出来ました。私には、その男のように世の中を正そう

という大それた望みを抱けないので。貴女はそれを臆病だとお笑いになるやもしれません。しかし、私は今手が届く範囲での幸せの方が大事に思

えるのですよ。それは貴女にあ

の時お会い出来たからかもしません。

それでは、貴女は身体も弱いようですから、この季節特に
氣をつけてやつて下さい。

この手紙を結んだ枝はネコヤナギの枝です。私の許にも早く春が訪れてくれれば良いのですが。

敬具”

ランプに照らされた、愛しい文字。性格は朗らかでいらっしゃるのに文字はとても流麗な几帳面な文字をお書きになる。きっと、それは人格を表しているに違いない。その綺麗な文字の上に、重力に耐え切れなくなつた雲が零れ落ちて染み込んでいった。

「貴方様にお逢い出来て、紫も嬉しうござります。けれど、我が身は貴方様のものにはなれませぬ。…どうか、お許し下さいます」

そう、彼と出逢つたのは寒さも厳しい朝のことだつた。悴んだ手がとても冷たくて、おミツさんにお手袋を出して貰つたのを覚えてゐる。そんな朝だったからこそ、彼にめぐり逢えたと言つても過言ではないだろう。

あの朝は何故かとても急いでいた。何故だらう。ああ、呉野さんと図書室へ早く行つて新しく理事長先生に贈つて頂いた本を一番に見ましょねとお約束をしていたからだつた。結局遅れていつて、拗ねた呉野さんに謝ることになつてしまつたのだけど。すぐに楽しそうに“嬉しそうよ、何かおありになつたの？”だなんて言われて思わず固まつてしまつた。本当にあの人は勘が鋭くて困る。

そり、だからあんなに急いでいて。髪紐を木の枝に引っ掛けるなんて、普段なら恐らくやらないであろうへまをしてしまったのだろう。気ばかり急いで、枝に絡まってしまったそれを解くことが中々出来ない。あまりの間抜けさに思わず涙が溢れそうだった。

「大丈夫ですか？」

最初はよもや自分に声をかけているものだとは思わずぽんやりしていると再度同じ声がした。

「大丈夫…ではないですね。すみません、少し我慢していく下さいね。」

涼やかな声が今度は耳許で聞こえたかと思つと、しなやかな指先が伸びてきた。

今まで強情に枝に恋慕していた髪紐は嘘のように彼にあつたりと身を委ね、私の身をもその場から解放したのだった。後々考えてみると、単に私よりも彼の方が手先が器用な上、絡まり具合をきちんと認識出来ていただけに過ぎなかつただろうけれど。

あまりに間抜けな自分の姿と咄嗟に助けて頂いた殿方の出現に自失状態になっていた私はお礼を申し上げることも忘れ、ただただ目の前のひとを見つめてしまつていた。

「あ、すみません…思わずお困りのじ様子だったので勝手に手を出してしまいました。見ず知らずの男に触られるのはさぞお嫌だつたでしょに。謝つて済むような話ではないでしょうが本当に申し訳ない。それでは、私はこれで。」

「あ、あの…

お待ち下さい。ありがとうございました。私自身ではどうにもならない。お気を遣わせてしまつたようで申し訳ありません。」

「そう、それなら良かった。

では、また会えると良いですね、若紫の君。」

彼はほつとしたように破顔し、余程急いでいたのだろうが、すぐに足早に歩き去つていった。

数歩先に学生証を落として。

走り寄つて拾い上げてみると、それはすぐ近くの大学のものだつた。そういえば、その学校指定だという渋い紫紺の袴を穿いていた気がする。

慌てて追いかけよつとしたけれど既に彼の姿はない。どうじょうかと考え、何気なく時計を見たといひでいひも急いでいたことを思い出した。

その大学は近いとはいえ、ここから一つ駅を行き、更に少し歩いたところにある。そして、今の時刻を鑑みて往復すると約束にも、朝の時間にも遅れてしまつ。仕方ない、後で必ず届けますからと胸に誓つて私はその場を後にすることなかつた。

「…あの、これをお探しなんじやありますんか？」

次の日。小雨がしつとと降り、更に冷え込んだ日。私は学生証を返すため昨日より少し早めの時間に、お気に入りの落ち着いた赤紫の傘を差し、はやる気持ちを抑えて学校への道を歩いていた。

ふと昨日と同じ辺りに差し掛かると、あのひとが何か探しているようだつたので思わず声をかけてしまつた。

学生帽を田深く被つていたためによく分からなかつたけれど、振り返つたその顔にほんの少し安堵が浮かんだのが見てとれた。道着の背中も、学生帽もすっかり湿つてしまつている。このひとはいつかやりつけやって探していたのだろうか。

「ああ、貴女が持つていてくれたんですね。昨日さうして探したのですが見当たらなくて。おかげで今朝の効用も濡り切らずに済みました。ありがとうございます。」

「もしよろしければお礼にカフローでも、と言いたいところですが、平日ですし、こんな見知らぬ男とふたりきりはお嫌でしょう。」

「え、あの、その…」

「ですから、私のことを知つて頂きたい。

私は毎朝この時間にこの樹の下でお待ちしています。そうして手紙をお渡ししましょう。勿論、貴女がいらっしゃらなくても結構です。どうでしょうか?」咄嗟に返事が出来なくて真っ赤な顔のまま、下を向いてただ小さく頷くことしか出来なかつた私は、その時彼が口許を手で覆いながら顔が弛みそうになるのを必死堪えてることなど露ほども知らなかつた。

“ 拝啓 紫紺の君

貴方様からのお手紙、今までとても嬉しうげございました。

“けれども、一身上の都合により……”

「いやではない。こんなことを書きたい訳ではないのに。」

“ もへ、あの場所で花が咲く季節となつてしまひましたね。
白く氣高く、儂い花。それは私にとつて、世の無常を思い知らされ

るのと同義でした。

しかし、あの樹の下で毎日のように待つ貴方様のおかげであの花の

優しさを知ることが出来ました。いえ、貴方様の優しさが樹にも情を移させたのでしょうか。今ならきっと、やっとあの花が咲き誇る様を眺められそうです。

しかし、もうこれ以上を望んでは罰が下るといつものです。これ以上は貴方様に『迷惑がかかつてしまつ』それは私が嫌なのです。ですからもうお会いすることは出来ません。

どうか私の最期の我が儘だと思ってお聞き届け下さい。

この手紙を渡すときがきっと貴方様に逢う、最期となる。あの花・桜舞う樹の下で。

“これからも辛いことはあるでしょう。朝に、夕に。泣いてしまうこともあるでしょう。
けれど、変わらないものもあるのだと、同じく『優しい』刻もあるのだから。
何の悔いもなく、風に誘われるままに枝を離れることとなるよう、
儂くとも毅然とした人生を送りとげます。
それを見た貴方様に美しいと思つて頂けるよつ。

敬具”

(後書き)

今回の企画内容を読ませて頂いた時、桜が咲き誇る様よりもまず真っ先に、桜が風に吹かれて散りゆく風景が脳裏に浮かびました。その中で哀しそうに佇むひと。これが私が描いた“紫”です。この、春という季節は出逢いも別れもあります。けして明るく嬉しいことばかりではありません。けれど、その中でも何かを見出だせたらと思えるのです。

実はまだこの続きの構想も練つてあるので、いつの日にか外に出してあげれたらと思っています。

最後となってしまいましたが、素晴らしい企画に参加させて下さった次深様、ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9882d/>

紫の縁

2010年10月28日03時17分発行